

# 宮沢賢治心象スケッチ「三六八 種山ヶ原」パート 四の行方：下書稿(二)の生成との関わりで

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 静 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7010">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7010</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



# 宮沢賢治心象スケッチ「三六八 種山ヶ原」パート四の行方

——下書稿(二)の生成との関わりで——

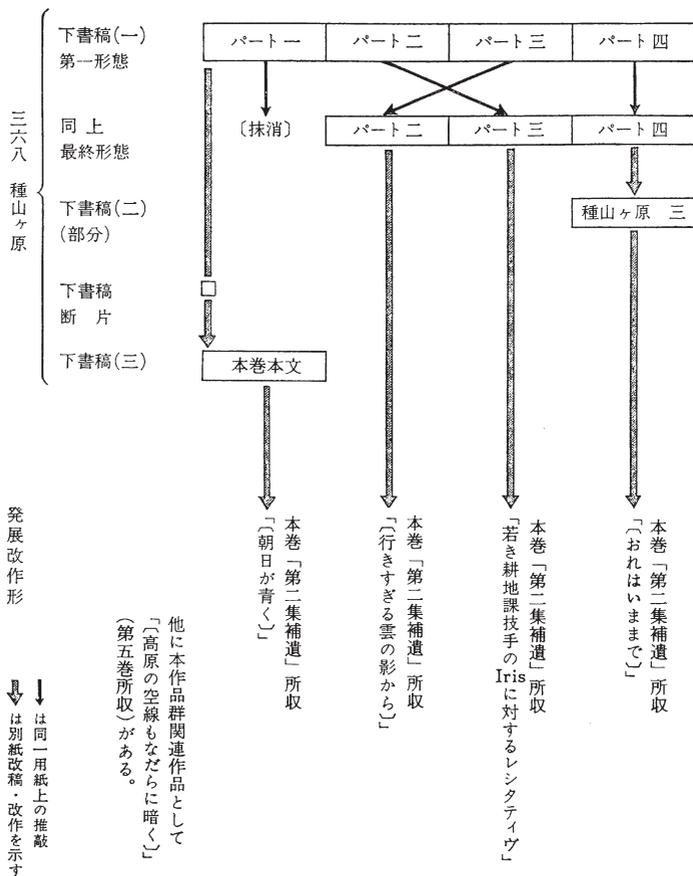
杉 浦 静

## 1 はじめに

「三六八 種山ヶ原」(一九二五、七、一九)は、新校本宮澤賢治全集(以下、新校本全集と略記する)では、推敲の最終形態(下書稿(三))を本文化しているので、全二六行の比較的短い心象スケッチとして本文が掲載されている。しかし、その生成過程は非常に複雑である。現存する最も早い草稿(下書稿(一))は、一面28行の赤罫詩稿用紙三枚六面にわたって書かれ、パート一からパート四までの一六〇行を越える長大な心象スケッチである。下書稿(一)の第一形態成立後、各パートは、異なった推敲過程を経て最終形態へと至り、さらに、逐次形(下書稿(二)、下書稿(三))が成立、さらに下書稿(二)の各パートごとに、改作・発展形が成立している。

新校本全集は、この生成過程を推移概念図として次のように図式化している。<sup>1)</sup>

「三六八 種山ヶ原」系作品群推移概念図



本稿では、このうちパート四の生成過程を再検討し、下書稿(一)と下書稿(二)のそれぞれの最終形態の位置づけに  
 対して新たな仮説を提出することを目的とする。

2 下書稿(一)の推敲から下書稿(二)へ

「三六八 種山ヶ原」パート四は、赤罫詩稿用紙に鉛筆を用いて書かれた下書稿(一)の第一形態成立後、鉛筆および消しゴムを用いた推敲が行われている。その第一次の推敲結果は次のとおり(冗字、誤記等を整理して示す)。

パート四

たくさんの藍燈を吊る

巨きな榎の緑廊パゴラを

紅やもえ黄に燃えあがつたり

暗い石油をながしたり

水はつめたく涉ってくる

わたくしはこの緑色の幾層楼を

月長石の天に掲げる古いたやの樹の下で

白い折帯皺をふみ

つめたいレンズを口にふくまう

……青い花 まぶたにゆれる……

水には魚のひれの模様もできてゐて

底の砂利でもうごいてゐる

……イリスの花が

みんなまっ赤に燃えあがる……

いったいこゝは

馬の水のみ場なのだ

そこらの草もふみにじられて

蹄のあとがずっと下流までついてゐる

上の野原であそんでゐて

一疋さきにかけてだと

みんなつゞいてかけて来て

こゝではちゃうど

右横隊になるわけだ

いまそらはもうひじょうな風で

風もひかつてかけちがひ

ひぐらしもなけば

冠毛もとぶ

……アイリスの火は

みんな熟した苹果にかはる……

なお、この第一次の推敲結果では、消しゴムで消された箇所等は空白のままに残されていた。後に、その部分には、詩句が増補されることになるが、その時に用いられた筆記具は濃い鉛筆であつて、第一次の推敲で用いられた鉛筆とは異なる種類のものである。

この第一次の推敲結果成立後、最終行の左方欄外下方に、第一形態を消しゴムで消した上に重ねて、推敲に用いられたと同種の鉛筆で「幻想一を加へる」と書き同じ鉛筆で丸く囲っている。

これは、以下に述べるように、このパート四の更なる手入れのための覚え書と考えられる。

ついで、新校本全集で下書稿(二)として整理されている草稿が書かれた。用紙は、下書稿(一)と同じ赤罫詩稿用紙を使用している。タイトルは、「種山ヶ原三、」であるが、第一形態は、下書稿(一)のパート四に描かれていた題材を並べ替えて再構成しながら、さらに新たな題材を追加していったものである。

下書稿(一)パート四の第一次の推敲結果の最終部には、次のような一節があつた。

いまそらはもうひじょうな風で

風もひかつてかけちがひ

ひぐらしもなけば

冠毛もとぶ

この詩句をそのまま利用した詩句が、下書稿（二）の終末部に近い箇所のように現れている。

いまそらはもうひじょうな風で

雲もひかっかけてかけちがひ

ひぐらしもなければ冠毛もとぶ

そして、さらにこれに続けて、

（おれはいままで

房のつかない上着など

まだ着たことがないからな）と

さう云ったのは誰だったらう

あゝいま一瞬わたくしは

その巨きな栗の木の散点した

うつくしい苹果青いろの傾斜を

設計された果樹園だと

どこかでぼんやり考へたのは

今朝早かったのですっかりつかれてしまったのだ

と「わたくし」の心象が付加されている。これらは、下書稿（一）パート四の第一形態では、

(一行不明)

(一行不明)

(一行不明)

(数文字不明) おれはいま、で

(数文字不明) 房の付かない着物など着たことはない

松の木(数文字不明) うつくしい

まっ青に(以下不明)

そらは(以下不明)

雲もひかってかけちがひ(以下不明)

……アイリスアイリス

いまアイリスの赤い火は

みんな熟した苹果にかはる……

苹果青の草地に

あちこちならばこんな巨きな栗の木を

設計された果樹園だと

たゞいましてどこかで誰か考へてゐた

といったん書かれ、のちの推敲過程できれいに消しゴムで消されていたものである。

この下書稿(一)の第一形態では、語り手の脳裏に一瞬ひらめいた心象としてスケッチされていたものが、下書稿(二)

では、明確に「おれはいままで」と語っている人物の姿を、「わたくし」が思い浮かべてそれは誰であったかと考えているのである。このような想起の挿入が、「幻想一を加える」と、下書稿(一)の濃い鉛筆による推敲の前に書き込まれたメモの指示に従ったものであることは、疑いなくであろう。

下書稿(二)は、このように、下書稿(一)パート四の推敲の結果を引きついだものとして書かれた。しかし、単に推敲結果を引き写すのではなく、題材の順番を変えたり、あらたな題材の付加などをしたものである。さらに、タイトルも、「パート四」ではなく、「種山ヶ原三」としている。しかも、この題は、罫の三行分の中央に書かれている。

このようなタイトルの書き方は下書稿(一)での各パートの場合とは全く異なる。これはこの下書稿(二)が、独立した一篇のスケッチとして書かれていることを示しているのである。下書稿(二)第一形態執筆の段階で、「種山ヶ原」パート一〜四を、「種山ヶ原一」、「種山ヶ原二」、「種山ヶ原三」という三部作へと、組み替えるという構想が胚胎していた可能性も考えられるだろう。

### 3 下書稿(二)の推敲

このようにして成立した下書稿(二)の第一形態は、次のとおり。

種山ヶ原 三、

やっぱり馬のしわざなのだ

ところがこゝは

いちめんのかきつばたの花を

馬の水呑み場処なので

こんなにあちこち折ったのは

流れによるほど

草もふまれてまばらだし

楊の皮もむしられて

蹄のあとがずつと下流までついてゐる

みんないっしょに上の野原で遊んでゐて

日中になると

にはかにかげらふや渴きを覚え

一びきさきにかけてせば

続いてみんなかけおる

結局そこらの傾斜では

右横隊のかたちになつて

もうわれがちに流れにはいり

ならんでのどをぐくぐくやつたり

あきてはじつと蹄をつけて

しつぽをばしやばしや振つたりする

それがいまにも風のやうに

あの青ぞらをおりて来て

そこらの花をぐらぐらゆすりさうなのは

じつはこつちも暑く渴いてゐるためだ

たくさんの藍燈を吊る

(ここまで表)

大きな櫛の緑廊を

紅やもえぎをながしたり

暗い石油にかはつたり

水はつめたくすべってくる

すくへば水に魚のひれの模様もできて

底の何処でも影がおなじにゆれてゐる

じつに何と緑色の幾層楼を

月長石の天にかゝげる

巨きないたやの木であらう

またその下の白く立派な折帯皺

林の奥はひっそりとして

もう一びきも鳥がなかない

けさ上の原を横切るときは

こゝは一本の緑の紐に見えてゐて

もう秋の虫がないてゐるなとわたくしが云つたら

あの馬をひいた男は

なあにみんな鳥だと云つてわらつてゐた

いまごろはあの人ももう馬を放して

またもとのけさやつて来た尾根みちを

また戻つてゐるころだ

いまそらはもうひじやうな風で

雲もひかつてかけちがひ

ひぐらしもなければ冠毛もとぶ

(おれはいまま)

房のつかない上着など

まだ着たことがないからな)と

さう云つたのは誰だつたらう

あ、いま一瞬わたくしは

その巨きな栗の木の散点した

うつくしい苹果青いろの傾斜を

設計された果樹園だと

どこかでぼんやり考へたのは

今朝早かつたのですっかりつかれてしまったのだ

これは、「種山ヶ原」パート四第一形態の第一次推敲の最終形態の前半部と中間部を入れ替え、次いで新しい一節を並べた後に、最終部を接続し、さらに第一形態の最終部(推敲過程で削除された箇所)を追加したものである。

馬の水飲み場において、上の原から降りて来て水を呑んだりする馬たちの様子を想像し、さらに、溪流沿いの林の木々を描く。種山ヶ原から流れ下る溪流沿いのスケッチである。その後、一転して、今自分のいる場所を今朝上の野原眺めた時の「馬を引いた男」との会話を想起し、さらに、「おれはいまま」ということばを發したのは誰だったかとか、種山ヶ原の傾斜地を「設計された果樹園」と考えたりとかを「ぼんやり考へ」て結ばれている。

下書稿(一)パート四では自然のスケッチのみに集約するように推敲が行われていたが、その最終形態をひきついでこの「種山ヶ原三、」(下書稿(二))では、

林の奥はひっそりとして

もう一びきも鳥がなかない

けさ上の原を横切るときは

こゝは一本の緑の紙マに見えてゐて

もう秋の虫がないてゐるなとわたくしが云つたら

あの馬をひいた男は

なあにみんな鳥だと云つてわらつてゐた

いまごろはあの人ももう馬を放して

またもとのけさやつて来た尾根みちを

また戻つてゐるころだ

という一節が追加されたほか、「おれはいままで」と言つた人が想起されたりする。牧場をめぐる他者との交渉がスケッチ中に取り込まれたのである。

この後、まず最初に第一形態を記入したのと同じ鉛筆によって手入れがなされた。この手入れは細部の整えにとどまつている。しかし、この手入れの後、濃い鉛筆を用いてさらに手入れがなされた。この手入れは、題名の削除を含む大幅なものであり、詩稿用紙表の後半から裏の前半のみが残された。これが下書稿(二)の最終形態となる。

けれどもこゝはもういちめんのかきつばたの花

それをあちこち折つたのは

もちろん馬のしわざである

馬がわれがち流れにはいり

なぜならこゝは

いちばんはやる馬の水のみ場所らしい

ならんでのどをごくごくやつたり

あきてはじつと蹄をひたしたまゝ

しっぽをばしマやばしマや振つたりする

さういふところをたしかに見たのは

あの柳沢の湧水だ

それがいまにも嵐のやうに

上の野原をおりて来て

そこらの花をみんな潰してしまひさうなのだ

じつはこっちが暑く渴いてゐるためだ

たくさんの藍燈を吊る

大きな榎の緑廊を

紅やもえぎをながしたり

暗い石油にかはったり

水はつめたくすべってくる

第一形態の前半部の馬の水飲み場の河岸や、まわりの木などの具体的な描写は切り詰められ、水飲み場での馬たちの挙動を想像する根拠が柳沢での実見をもとにしていることを付加している。さらに、後半部の「大きな榎の緑廊」を流れて来る流れの描写も五行のみになり、流れの中の水影や周りの木などの描写も削除され、その後の牧場をめぐる他者との交渉も消されてゆく。かきつばたの花が踏みにじられた馬の水飲み場と、そこでの馬の様子の想像、そこに林の中から流れて来る溪流のみに、集約されているのである。

#### 4 濃い鉛筆による推敲 再び下書稿(一)パート四と下書稿(二)の融合

この下書稿(二)の手入れに用いられた「濃い鉛筆」は、「種山ヶ原」下書稿(二)の最終形態に到るための手入れに用いられた鉛筆と同一のもつと見られる。また、推敲の文字の筆勢や書体も共通している。さらに、「種山ヶ原」下書稿(二)パート一からパート四の書かれた紙葉(赤野詩稿用紙)三葉(表裏)の表面右上隅には、「1」から「3」の通し番号があり、また、下書稿(二)の書かれた紙葉(同じ赤野詩稿用紙)の表面右上隅にも「4」の番号が記入されている。この番号は、「濃い鉛筆」による記入であるかどうかは判断が困難であるが、同一の鉛筆による連続した記入である。少なくとも、下書稿(二)の最終形態が成立した後、下書稿(一)から一連のものとして、整理された時期があったこと

は疑いない。

これらを総合して考えると次のような過程が推定される。

下書稿(二)は、はじめ「パート四」(下書稿(一))を引きつぎながらも「種山ヶ原三、」として、独立した心象スケッチとして書かれた。その際には、下書稿(一)を、「種山ヶ原一、」「種山ヶ原二、」として再構成する意図が想定される。しかし、下書稿(二)の推敲の過程で、おそらくこれを再び「種山ヶ原」パート四へと組み込むアイデアが生まれ、下書稿(一)と下書稿(二)を一連のものとして手入れし直すことになった。それが、下書稿(一)(二)に一貫した「濃い鉛筆」による手入れであった。

それでは、このような推定が成り立つとすれば、「濃い鉛筆」による手入れの結果、章題が残された下書稿(二)のパート四と、題名が削除された下書稿(二)は、どのように融合されることになったのであろうか。

まず、下書稿(一)パート四の「濃い鉛筆」による手入れ結果を確認することにしよう。

パート四の最初の鉛筆と消しゴムを使用した手入れの結果は、本論冒頭に示した。そのあとで行われた濃い鉛筆による手入れの結果(最終形態)は次のとおり。濃い鉛筆部分を太字で強調して示す。

#### パート四

水はつめたく渉ってくる

わたくしはこの緑いろの幾層楼を

月長石の天に掲げる古いいたやの樹の下で

折帯皺の白をふみ

つめたいレンズを口にふくまう

……青い花 まぶたにゆれる……

たくさんの藍燈を吊る

巨きな櫺パゴラの緑廊を

紅やもえ黄に燃えあがつたり

暗い石油をながしたり

水には魚のひれの模様もできてゐて

底の砂利でもうごいてゐるし

砂も大きくうつつてゐる

ところがそこに石灰岩の礫がひとつもないやうだ

江刺の方の下り口になら

立派な露土が見えてゐた

あすこに一つ小さな水車をこしらえて

上の野原へ入れるだけ

石灰抹をつくるといいんだ

……イリスの花が

いつかまつ赤に燃えあがる……

いったいこゝは

馬の水のみ場なのだ

そこらの草もふみにじられて

蹄のあとがずっと下流までついでゐる

上の野原であそんでゐて

一疋さきにかけてだと

みんなつゞいてかけて来て

こゝではちやうど

右横隊になるわけだ

……アイリスの火は

いまそらはもうひじやうな風で

雲もひかつてかけちがひ

ひぐらしもなげば

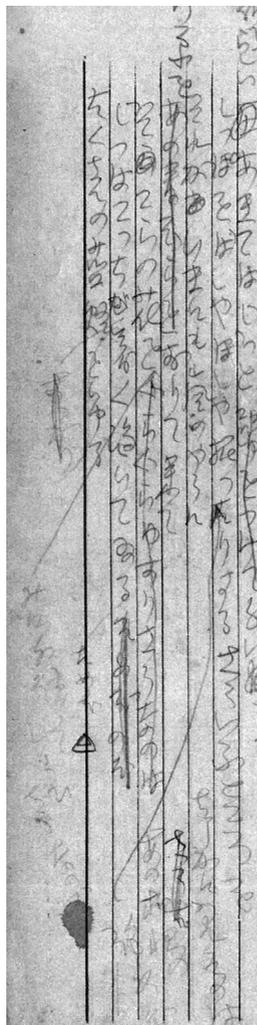
冠毛もとぶ

この最終形態では、馬の水飲み場になっている小流れのなかに石灰岩の礫が見えないことから、上の野原の土壤改良の方策へと動いてゆく心象を追加している。「種山ヶ原」下書稿（一）パート一からパート三までの第一形態から最終形態への推敲は、上の野原の土壤調査や土壤劣化の原因の探求などの削除の方向でなされているのだが、ここでは、逆にそれが「濃い鉛筆」、即ち最終の手入れで追加されている。しかも、前後の心象の流れからすればいくぶんの唐突感を免れないやうにある。

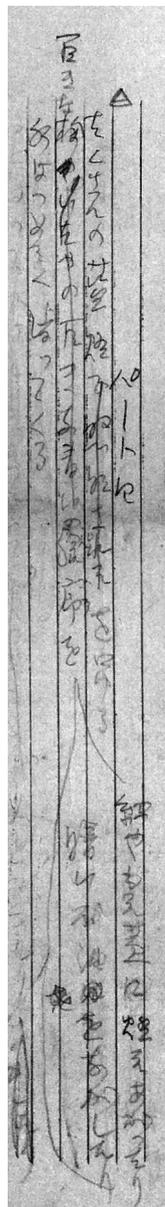
先にも記したように下書稿(一)最終形態の1〜5行目は、下書稿(二)最終形態の終末部五行とほぼ同じである。また、22〜30行目は、下書稿(二)最終形態の前半部と重なる。ただ、滝沢の湧水での実見は下書稿(一)にはなかったものだが。

つまり、下書稿(二)最終形態は、下書稿(一)パート四最終形態の一部とほとんど重複してしまっていることになる。下書稿(二)第一葉の野の最終行の下方に二重の△の記号が記されている。この記号は、やや濃い鉛筆で記されたもので、記号の前行の「じつはこつちが暑く渴いてゐるためだ」の推敲形(「ためだ↓のだ↓ためだ」と最初の形に戻っている)末尾に付されたものである。そして、この次の行は「たくさんの藍燈を吊る」である。(図版1)

図版1



下書稿(二)第一葉



下書稿(一)  
第三葉

この「やや濃い鉛筆」で記された同じ記号が、下書稿(一)パート四の最終形態にも存在する。(図版2) その位置は、第三葉野の22行目右肩である。21行目は、野中間に「パート四」と章題が書かれ、22行目は「たくさんの藍燈を吊る」である。まさに、別紙葉に書かれた同一詩句の行の前後に二重△記号が記されているのである。下書稿(二)は先に確認したように、下書稿(一)パート四を引きつぐようにして、さらに推敲がすすんだものであるから、下書稿(二)最終形態の冒頭から二重△記号までの詩句が、下書稿(一)パート四の二重△の位置に挿入されるという指示ではないかと推測されるのである。

この指示に従って、挿入したパート四の最終形態は、次のようになる。

パート四

なぜならこ、は

けれどもこ、はもういちめんのかきつばたの花

いちばんはやる馬の水のみ場所らしい

それをあちこち折ったのは

ならんでのどをこくこくやったり

もちろん馬のしわざである

あきてはじつと蹄をひたしたま、

馬がわれがち流れにはいり

しっぽをばしやばしや振ったりする

さういふところをたしかに見たのは

あの柳沢の湧水だ

それがいまにも風のやうに

上の野原をおりて来て

そこらの花をみんな潰してしまひさうなのだ

じつはこつちが暑く渴いてゐるためだ

たくさんの藍燈を吊る

巨きな榭の緑廊を

紅やもえ黄に燃えあがつたり

暗い石油をながしたり

水はつめたく涉ってくる

わたくしはこの緑いろの幾層楼を

月長石の天に掲げる古いいたやの樹の下で

白い折帯皺をふみ

つめたいレンズを口にくくまう

……青い花 まぶたにゆれる……

水には魚のひれの模様もできてゐて

底の砂利でもうごいてゐるし

砂も大きくうつつてゐる

ところがそこに石灰岩の礫がひとつもないやうだ

江刺の方の下り口になら

立派な露土が見えてゐた

あすこに一つ小さな水車をこしらえて

上の野原へ入れるだけ

石灰抹をつくるといひんだ

……イリスの花が

いつかまっ赤に燃えあがる……

いったいこゝは

馬の水のみ場なのだ

そこらの草もふみにじられて

蹄のあとがずっと下流までついてゐる

上の野原であそんでゐて

一疋さきにかけてだと

みんなつゞいてかけて来て

こゝではちゃうど

右横隊になるわけだ

……アイリスの火は

みんな熟した苹果にかはる……

いまそらはもうひじょうな風で  
雲もひかってかけちがひ

ひぐらしもなけば  
冠毛もとぶ

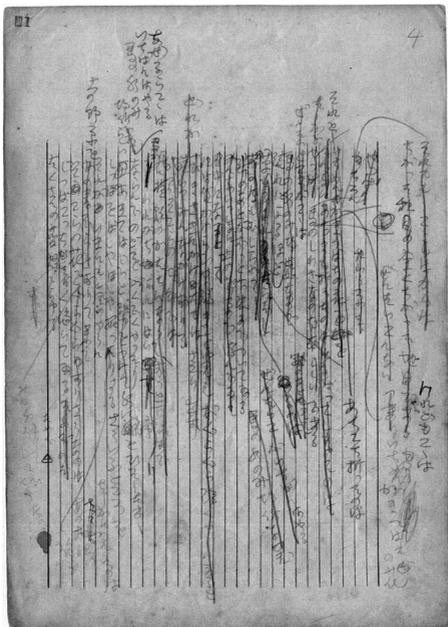
このようにして、いったん「種山ヶ原三」として再編成を目指して書かれた下書稿(二)は、その推敲の最終形態にいたった時、「種山ヶ原三」という三部作の構想は消滅し、再び下書稿(一)パート四の推敲過程のなかに吸収される形で、再生していったのである。なお、この時、同じように「濃い鉛筆」による手入れによって、下書稿(二)のパート二は、パート三に、パート三はパート二に配置換えされている。さらに、パート一については、同じ「濃い鉛筆」でもって手入れがなされると同時に消しゴムによってかなりの部分が消去されているのである。

注

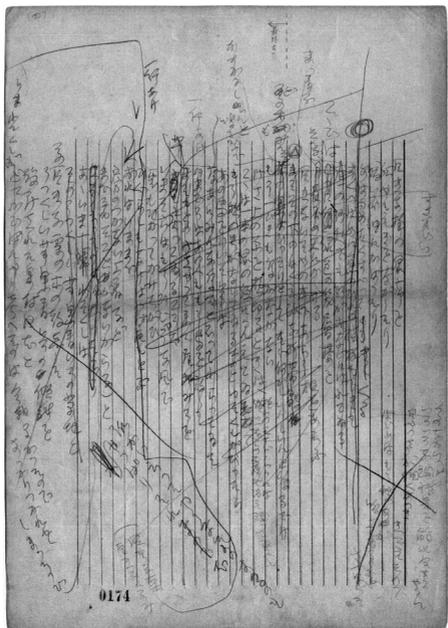
(1) 新校本全集第三巻校異篇541頁



下書稿(二) 第一葉表 (詩草稿番号: 四七五)



下書稿(二) 第一葉裏 (詩草稿番号: 四七五)



宮沢賢治心象スケッチ「三六八 種山ヶ原」パート四の行方

宮沢賢治記念館蔵